

平成 30 年 10 月 9 日 (火)

ないじえる芸術共創ラボ 古典インタプリタ日誌 ピーター マクミランさん WS 『阿不幾集』解釈—古今東西・共通項と相違点—

1, 8 回目のご来館

マクミランさん 8 回目のご来館では、和歌を専門とする若手研究者の米田有里先生（湘北短期大学非常勤講師）をお招きし、前回に引き続き卷子本『阿不幾集』^{あふぎしゅう}についてのワークショップを行いました。

2, 和歌についてのワークショップ

ワークショップでは、『阿不幾集』の和歌 5 首について先行研究をふまえながらよりよい解釈を検討しました。

- ・我が宿の池の藤波咲きにけり 山ほととぎすいつかきなかん
- ・長月はいくありあけになりぬらん 浅茅ヶ原のいとどさびしき
- ・さればこそ人通ひけり浅茅原ねたしや今宵露もこぼれぬ
- ・まれにくる乙女の袖やなでしこの花さきかかる巖なるらん
- ・わかるるを惜しとぞ思ふつるぎばの身をよりくたく契りなりけり

いずれも絵と対になっているので、絵にも注目しながらの検討です。



3, 「さびしき」か「さびゆく」か／月の形は？

「長月はいくありあけになりぬらん 浅茅ヶ原のいとどさびしき」は、元々『新古今和歌集』に収められた歌ですが、その時は下の句が「浅茅が月のいとどさびゆく」（秋下・暮秋の心を・521）となり相違がみられます。

マクミランさんはこの二首を訳し「ますます寂しい」（『阿不幾集』）「ますます荒涼としてくる」（『新古今』）と、意味に随分違いがあることに戸惑われたそうです。

米田先生は、この歌には他にも異同があること（「浅茅の霜のいとどさびゆく」（『拾玉集』）、「浅茅が霜のいとどさえゆく」（『慈鎮和尚

平成 30 年 10 月 9 日 (火)

自歌合』) を示されました。その上で、単に「浅茅が原～さびしき」とあるよりも「さびゆく」の方がより冬が忍び寄り冴え渡ってゆく様子を想起させるため、元々の家集にある『拾玉集』のような形から、『新古今』『阿不幾集』入集の段階で、それぞれ歌を選んだ人によって改変されたという指摘があると解説してくださいました。

『阿不幾集』には、『古今和歌集』や『新古今和歌集』などに出典をもつ歌も多く収められており、これらには「長月は」の歌のように異同がある場合もあります。マクミランさんはこういった例に出会った場合、『阿不幾集』に収められている形を重視しつつ、改変が行われた経緯＝鑑賞の在り方の変遷と考え、鑑賞のポイントとして観ておられるとのこと。



この歌は「長月はいくありあけになりぬらん」とありますので、陰暦九月も十六日を過ぎた頃、段々と冬へと向かう寂しい情景が浮かぶように「さびゆく」でとったほうが良いのではと考えられたそうです。

ところでこの和歌に添えられた扇の絵には、まるで満月のような白い月が描かれています。

しかし「有明の月」とは、陰暦十六日以降に夜明けに白々残った月のこと。まん丸に描いてしまっても良いものでしょうか、と、マクミランさんは疑問を感じておられます。

マクミランさんが光琳カルタをご覧になったときにも、すべての月がまん丸に描かれていることが気になったそう。現在作成中の英訳百人一首カルタには、すべてのカードに歌の世界観を表現した絵が描かれています。「有明の月」をどのように表現するのがふさわしいのか課題としながらも、月をまん丸に描くのは記号のようなもので分かりやすいかもしれないとおっしゃっていました。

4、「乙女」と「Maiden」—言葉のもつ世界観—

「まれにくる乙女の袖やなでしこの花さきかかる巖なるらん」について米田さんは、「(百年に一度という) 稀に来る乙女子の袖が撫でたのであろうか。きっとそれほどまでに長い年月を経てきた、撫子の花が咲きかかる岩なのだろう」と現代語訳を試みられました。

平成 30 年 10 月 9 日 (火)

この歌の背景にあるのは仏教的な概念で、四十里の大石を薄衣で百年に一度払い、石は摩滅しても終わらない長い時間を指す「劫(こふ)」をもとにして詠まれています。

少し難しい概念ですが、マクミランさんが英訳に取り組んでおられる「羽衣」というお能でもこの概念が重要だったと話してくださいました(この日の WS の冒頭に、お能について当館教授の小林健二先生より講義がありました)。



「巖」は大きな岩を指し、悠久を示す場合に用いられることが多い語で、末永い御代を言祝ぐ賀の歌で詠まれることが多いとのこと。

この歌に合わせた扇の絵では、可憐な撫子の花にポイントを絞っ

て描いています。マクミランさんはこのようにモチーフのうちひとつだけを全面に出して描くスタイルは光琳にも通じると思われたそうで、大変印象的に感じると話してくださいました。

ところでこの場合の「乙女」は天女という意味ですが、英語にも同様の表現があるのでしょうか。

マクミランさんにうかがうと「maiden」という語がふさわしいのではとのこと。Maiden は、少女、乙女、処女、未婚のといった意味があるそうで、「乙女」に通う純潔で可憐な存在といった世界観を持った言葉なのだそうです。また古典的なイメージがあり、「ジュリエット」のような女性を想起させるのだとか。「天女」というイメージを強調したい場合は「heavenly maiden」と



平成 30 年 10 月 9 日 (火)

して、神にお仕えする役割を示すこともできるそうです。

5, 共通項と相違点—古今東西—

「乙女」と「maiden」のように、東西でも共通する世界観をもつ言葉や概念があります。このような例は他にもあるのでしょうか。また、英語圏にはない概念やイメージを翻訳する場合に、どのような工夫をしておられるのでしょうか。マクミランさんにうかがってみました。

たとえば「我が宿の池の藤波咲きにけり 山ほととぎすいつかきなかん」は、「私の家の池のほとりに富士の花が咲いたことだなあ、(夏風が吹いて)池の面にも波立っているよ。山にこもっているほととぎすは、いつ来て鳴いてくれるだろう」と訳すことができます。

山ほととぎすは初夏の景物であり、声が待ち遠しいものとして詠まれる存在ですが、恋の相手と言葉を交わすことを重ねて詠む場合もあるそうです。

マクミランさんの故郷アイルランドでも、ほととぎすは夏を告げる待ち遠しい鳥というイメージがあるそうです。しかし美しい初夏の田園風景は想起するものの、恋愛のイメージとは重ならないとのこと。

反対に、「さればこそ人通ひけり浅茅原ねたしや今宵露もこぼれぬ」は「思った通りだ。誰かが通ったのですね。この浅茅の野を(あなた

のもとへ)。悔しいことに、今宵(私があなのもとへ通う今は)露さえもこぼれない」という悲しい恋の歌ですが、「通い婚」という制度は英語圏は勿論、現代の日本においても一般的ではなく、説明が必要ではあります。

しかし和歌の英訳にいちいち説明的な文言を入れてしまうと鑑賞の妨げになるだろうとのことで、最も大切なポイントである「恋人が会うこと」に焦点を合わせることにしておられるそうです。

文化圏が異なっても歌の主題を重視することで伝わりやすい翻訳が可能になる例です。



平成 30 年 10 月 9 日 (火)

さらにマクミランさんは、和歌によく用いられる掛詞について語っていただきました。

掛詞とはひとつの言葉に意味を何重にも重ねることによって、三十一文字の中で豊かな世界を表現したり、言葉遊びを楽しむことができる技法です。マクミランさんは、掛詞が可能になるのは日本語に同音異義語が多いからではないかと考えておられ、たとえば有名な小野小町の歌「花の色は移りにけりないたづらに わがみよにふるながめせしまに」の「いたづらに」が、上の句にも下の句にも掛かっているととることが出来る自由さも、特色のひとつだと感じておられるそうです。

こういった言葉遊びや多重になったイメージを英訳に活かすために、様々な工夫¹をしておられるマクミランさん。

『扇の草紙』翻訳の完成が楽しみです。

¹ 百人一首三九番歌の「浅茅生の小野の篠原しのぶれどあまりてなごか人の恋しき」は、まばらに生える茅の中に篠竹が生い茂っている様子にかけて、描くそうとしても隠しきれない恋心を詠んだ歌ですが、英訳を試みたマクミランさんは、それを表現するために暗号を忍ばせておられます。



I try to conceal my feelings, / but **they** are too much to bear —/
like reeds **hidden** in the **low** bamboo / of this desolate plain. /
Why do I love you so?
赤字の部分詠むと「they show」となり、隠したかった自分の気持ち表れてしまうということが暗に示されています。(ピーター・J・マクミラン『英語で読む百人一首』文藝春秋、2017年)